

---

# 緋と蒼

葵ヶ原 燈夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

緋と蒼

### 【Nコード】

N4339A

### 【作者名】

葵ヶ原 燈夜

### 【あらすじ】

虐げられる緋い少女と蒼い少年が経験する色々な物語。

## 第1翔『大きな木の下で』

太陽が人々を見下ろし、秋という季節には似合わぬ熱を振り撒いている。

岸核勾は久しぶりに真つ赤な自らの翼を使い、飛翔していた。特に意味はない。ただ、高いところからどこか遠くを見たくなったのだ。

暑い。それが彼女の初めに抱いた感想であった。飛び立つ前にわかっていたことであつたが、昇ることで改めて実感させられた。

肩と腰に見える二対の翼が、イカロスの羽になったかのような錯覚さえおぼえる。

勾は体の強いほうではない。たちまち耐え切れなくなり、地上へと戻る。小走りに木陰の方へと向かつた。

見えた木陰の主は大樹。彼女が生まれる前からある巨木。樹齡は数百年を由に超えていた。

背中を幹に預け、目を伏せる。風と木々が奏でる音楽が聞こえる。ふと、辺りを見回す。

「誰も、いない」

勾はそう声を出す。しかし彼女はそれが恥ずかしくなる。

「こんにちは」

視線の少し先に『誰か』がいたからだ。

少年が立っていたから。

蒼い、少年が立っていたから。

## 第2期『蒼い少年』

全身を蒼で染めた少年、端種汀の瞳はすべてを吸い込むかのような魅力があるように勾には感じられた。

勾の肩には、いつの間にか取り出された、冷たく濡れたタオルが彼の手によって当てられていた。

「あ、ありがとう」

「どういたしまして」

勾と汀は幼なじみかのような親しさで会話をしているが、彼女がはじめて出会ってから、そうそう時間は経っていない。

「勾さんってさ、なんか……懲りてない……みたいだね」  
「うう……」

以前も全くといっていいほどに勾は同じ状況に陥ったことがあった。飛翔し、疲労したうえでの軽い熱射病であった。

「確かにあのときも汀君がいなかったら危なかったかもしれないけど、なんか、見たいって衝動は抑えられないんだよ、わたし。汀君はなつたことないの？」

「少しだけ目尻に涙を浮かべ、勾は問い掛ける。

「僕はないなあ。基本的には何かに熱くなるってこともないと思うし。集中するのも、泳いでるときくらいじゃないかな」

子供っぽい仕草をする勾を微笑みながら見て、汀は答えた。

「どう、そろそろ身体も冷めた？」

「あ、うん。ありがとうね」

「これ以上一緒にいたら、誰かに見られるかもしれないからね。僕はそろそろ行くよ」

「あ……」

汀が足を自分の家のほうへ向けようとしたとき、勾は声を上げた。

「どうかした？」

「うん。ちょっと聞きたいんだけどね、政府の方からわたし達の一族のところになんか来たんだけど、汀君のところにも来た？」

「それなら来たよ。有翼人のことも言ってたみたいだから多分同じくらいの日に」

苦笑いをしながら答える。

「大丈夫？ 増えないかな」

「大丈夫だとは思う。慣れてるしね。でも用心するに越したことはない。そう僕は思う」

二人は顔を見合わせ、頷いた。

### 第3期『蒼の境遇』

端種汀の属する水息人の一派‘水蓮’は有翼人の‘蜉蝣’と協定を結んではいたが交流自体は最近まであまり無かった。普通の人間は自分とは違うものに対して畏怖し、蔑視する。それを知っていたから人間に知られる可能性を少しでも減らすために交流を絶っていたのだ。

現在では、人間とも信頼関係を組む事が出来たため、争いがなくなり、交流もまたはじまった。

蒼い少年は、細長い建物の中で老人と対峙していた。

「なにかご用でしょうか？」

「汀、お前はわかつているのかい？」

顔立ちの似ている、全く色の違う老人は質問で答えた。

「彼女のことですか？」

「そうだ。そしてお前のことも含めてだ」

「それは、わかっています」

「やはりここにはお前を、お前の存在を認めたがらん者も多く居る」

汀は少し顔を翳らせ、俯きながらも言った。

「僕と彼女は同じ境遇です。だから僕は彼女を助けたいし、彼女に助けられたいんです。それがいいませんか？」

老人は彼の真剣な表情を目にした。

「私はお前を最長老としてではなく、祖父として心配しておったのだがな。ある程度までは私もお前を庇うことは出来る。それしかできないが」

「ありがとう、おじいさん」

老人に笑いかけると、穏やかな笑みを返してくれた。

汀は蒼瞳と呼ばれる存在であった。髪も蒼く、瞳も蒼い。

水蓮に伝わる言い伝えに蒼瞳というものは出てくる。

全身が蒼く生まれてくるものは蒼瞳といい、水息人や有翼人と比

べても超常的な力を持ち、全てを崩壊させるという伝説。

それは迷信の域を出ない。しかし、汀が生まれてからはじめて目が開いた日、両親が亡くなった。

そのことが汀に対する感情、態度を一変させた。

差別。彼はその対象となったのだ。

そして、それは蜉蝣にも存在した。それが岸核勾だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4339a/>

---

緋と蒼

2010年11月12日20時05分発行